

小学校のゴール型ボール運動における作戦の対話分析

ータスクゲームを生かした授業づくりを通してー

長澤 未姫 (秋田大学大学院)

1. 目的

小学校のボール運動では「自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりすること」を特徴とし、作戦の重要性が位置づけられており、作戦の内容を精緻に分析することの意義が指摘できる。これまでの対話分析から作戦の特徴を明らかにする研究では、作戦タイムの雰囲気がゲームでの動きに影響すること(岩永ら, 2013)や、中位児が上位児と下位児をつないでいること(山口, 2013)が明らかになっている。しかし、単元での話し合い活動全てを内容を含めて分析した研究はなく、戦術を含めて学習者の認知の詳細や全体像を明らかにする必要がある。そこで本研究では、ゴール型ボール運動の学習において、作戦タイム等における児童の発言を分析し、学習者が何を認知しているのか明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

- 1) 対象者：小学5年生 28 名
- 2) 期間：2024 年 9 月～10 月
- 3) 分析方法：データの分析は以下の通り行う。
 - (1) めあてを決める話し合い (5～7 時間目)、作戦タイム (4～7 時間目)、チームでの振り返り (5、6 時間目) における対話 (プロトコル) を IC レコーダーで録音し、逐語記録を作成する。また、授業の様子を録画し、分類の際の参考にする。(データのトライアングレーション)
 - (2) 対話 (プロトコルデータ) を KJ 法で因子毎に分類する。対話データを意味毎に区切り、意味内容に合わせラベルを付け、同じ又は類似のものをグループ毎に分類する。この作業を飽和状態まで続け、概念図化する。分類の過程で本研究である大学院 2 年次 1 名と、職歴 21 年の研究者 1 名で合意形成し、研究の妥当性、信頼性を確保する。(研究者のトライアングレーション)

3. 結果

分析の結果、概念図 (図 1) が明らかとなった。全体は、「攻撃の工夫」、「守備の工夫」、「動きの分析と予想」、「学習を高めるための目標設定と振り返り」、「コミュニケーション」、「学習の規律」、「その他」の七つの大因子に分けられた。

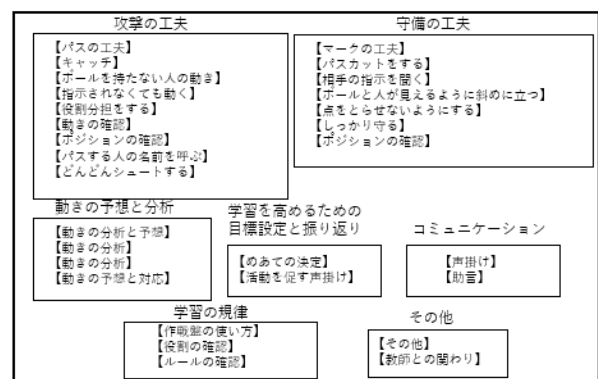


図1 ゴール型ハンドボール運動学習の形成概念

4. 結論

攻撃や守備に関する多種多様な作戦を考えていることが明らかとなった。ボールを持たない人の動きに関しての認識や、得意・不得意に合わせた作戦を選んだり、試行錯誤したりしていることが明らかになった。作戦盤やホワイトボードを活用し、味方や敵の動きを分析していること、よりよい動きを目指し、めあてを立て、それに対する振り返りを行う自主的活動が行われていることが明らかとなった。集団スポーツというボール運動の特性を生かし、チームで声を掛け合い、よりよい学習にしようとしていることが明らかとなった。グループ毎の差や対話内容がどう変化するのか、また、プレーの様相と共に事例的に傾向を明らかにすると新たな示唆が得られるだろう。

参考文献

- 1) 岩永智子・堤公一・福本敏雄 (2013) 作戦タイムを用いたネット型球技の授業づくりについてー中学校1年「バレーボール」の授業実践を通してー。佐賀大学教育実践研究(30):193-200。